

『オアシス』 序

食事と睡眠の他に、一日十二時間、職務や交通に七八時間使うとしても、まだ四五時間は自分の読書や仕事に使うことができる。しかしその時にまた別のしなければならぬ事柄があると、自分でも気に入らない文章を書いたり、見たくもない本や新聞を見たりするのは、本当の読書や仕事とは言えない。自分の思うままに使える、自分自身の私的な時間がないのは、まさにわれわれの生活をより単調にそして無聊なものにしてしまう。しかしながら偶然一二時間はのんびりと本を読む暇があって、しかも読んだ本に偶然にも一つ二つ目の覚めるような感じのものがあって、まるで砂漠の中でオアシス(Oasis)を見つけたようで、疲れた生命に少しは活気が戻ってきて、執筆の興味が湧き、気の向くままにいくつか書いたその結果がこの細々した随筆である。一九二三年一月二十日。

※初出：『晨报副刊』1923年1月25日